

日本の偉大さに関する

大いなる誤解

編集委員長

本稿は、『偕行』636号（昭和2年9月）に掲載された「日本の偉大さに関する法螺話」である。

この時期に、『偕行』が外国の日本批判論を紹介していたことに驚きを感じる。興味深い見解であり、時代を超えて紹介する。なお、原文については、読みやすくするために一部修正させて頂いた。

日本の偉大さに関する法螺話

以下は、ニューヨーク・タイムズ社発刊米国雑誌「カレント・ヒストリー」5月号に、「ロデリック・オー・マゼソン」が発表した論文の要約である。

吾人の眼をもつてこれを見れば、もとより虚構誇大の記事が多いが、またもつてその幾分の真理と、少なくとも外人の一部にこの如き観察をなすものがあるという点において他山の石となすべきものである。

彼は、あえて数年間「ホノルル・アドバイザー」の主筆をしたことがあり、1917年来朝して日本人記者

と共に「ジャパン・タイムズ」記者を務め、日本語を良くし、見分広く、東洋通だとのことである。

●はじめに

今日、世界における最も不可思議な話は、一戦争の硝煙の中から生まれ、他の戦争においていよいよ本物らしくなったところの「日本は強国なり」という信念がこの地球上に言われていることである。しかも、この大きな法螺は他の何処よりも日本自身が最も信じ切っているのである。

実は強国としての日本の主体は破裂せんばかりに膨らんだシャボン玉である。太平洋に関係する真の強国に対して、国土防衛はできようが、それ以外の目的に対して、日本の武力は、空想に過ぎない。正確な数字は秘密であるが、天皇は15万、20万の常備兵力を持ち、教育済みの予備兵は約2百万ある。

紙上の数だけ見れば、いかにも恐るべき有力な軍隊であるが、実用上から見れば烏合の衆たるに近い。日本はその兵力の半数を戦場に送るための武装をも持つておらず、また資源の貧弱さはいかなる遠征にも耐えられない。

他の唯一の島国英帝国は、世界大戦に参加した時、食料を求める多数の植民地を持つており、かつ国内には非常に発達している製造工業があった。ま

た、資源を購買可能な厳正、好意的な中立の友好国を持つていた。更に、世界の制海権を持ち、大なる国富と無限の信用を持つていた。それでも英国は、食料の欠乏と製造資源の逼迫に悩んだのであるが…。

日本は太平洋における如何なる戦争においても単に自国沿岸を制海しうるに過ぎないであろう。日本は、朝鮮、台湾を除いて如何なる植民地も持たない。しかも朝鮮は、ほとんど公然と反旗を翻している。台湾も同島の支那人の大半が、賈物でもいいから地方的自治を要求するのを、官僚的拳骨を振つてこれを粉砕してきた政策にたたら

れ、今や忠実ではありえない。日本から食料を輸入しなければ餓死を逃れられない中国は、公然の反日である。もう一つの隣国、露国は資源の供給により日本を支援するかもしれないが、同時に必ず日本国内に騒動を起こし、ドイツと同様に国体を転覆する機会を狙つている。

紙上の日本海軍力は、恐るべきものがあるが、軍艦の背後に天然・経済的資源の欠乏することを考えれば、日本艦隊は根拠地の近海でなければ有効に作戦できないことが認められる。奇襲的に使用する兵力としては、その艦隊は有力であるが、遠距離作戦のための攻撃兵力としては弱体であり、殆ど無

用に近い。

日本とその国民を知るものが、日本陸海軍が強いという感想を持たないのは、彼ら国民の悟りが鈍く創意力を欠き、かつ命令なしに活動できず、欧米人の目から見て個人的に無能であることを知っているからである。加えて彼らは過度の自惚れを持ち、更に近頃は重要な新しい観念を頑迷に排斥している。

勿論、例外的に偉い人物もいて、高い権威を持つている。このような少数の人間の指導によつて、日本は現状にこぎつけたのである。世界的偉人の一人、掛値なしの偉人は明治天皇であつて、天皇は西欧諸国が日本の門戸を叩きつつあるときに即位され、1912年まで在位された。近代の日本を創造したのは、実に明治天皇と天皇が賢くも選ばれた少数の顧問である。しかしながら、明治天皇の崩御以来、何らの進歩もなく、むしろ各種の方向において退歩を示している。

明治天皇の御他界と、欧米において教育を受けた側近・顧問の老衰や逝去と共に、日本には外国より更なる助力は必要ないという考えが生まれた。政府各省の顧問外国人は2、3の例外を除き契約を解除し、工業における外国人技師を免じ、日本汽船の外国人機関士や英国人船長をお払い箱とした。各

方面において外国人はつまみ除かれる一方、日本国民はなるべく国産品を購入し、外国製品を購入しなければならぬときでも日本の輸入業者より購入することを奨励している。あたかもこの運動が都合よく進行しつつある時、勃発した世界戦争は、この国家的計画を促進し、日本人にこの行為が賢明であつたと信じさせた。

第1次大戦の4年間、各工業国が互いに隣国と生命をかけてにらみ合つてゐる間、日本の工業は躍進に躍進を重ねた。賃金は2倍から4倍になり、戦争成金は前例のない奢侈に溺れ、正貨はこの国に流れ込んで1914年から1918年の間に貿易黒字7億ドルを蓄積することになった。仕事は幾らでもあるし、賃金は高い。そして、あらゆる製品に対して外国から注文が殺到した結果、生活費は2倍となり、すべての指数は上昇し、国内の物価は奔騰した。

●不景気の問

その後、戦後の不景気がやってきた。米國英國をはじめ殆どの国は、理論的にこの状況を迎えて、損失を減らし、産業の状態を整理し、労働の混乱を切り抜けて浮かび上がった。日本は、これに倣うことを恐れ、今日にいたるまで整理することなくやっ

ていこうとしている。工業製品の輸出は激減した。日本は新しい市場を獲得し、これを固持するため戦争のもたらした好機を利用することなく、不良品を製造し、注文の規格外の品物を船に詰めるだけ積んで、後のことを考えず、ただ欲の皮一点張りに目の前の1ドルを残すことなく掴み取つた。

その結果、外国の顧客は欧米の諸国が注文に応じられるようになると、直ちに乗り換えた。その結果、日本の新しい設備はほとんど休業状態となり、1918年以降の日本は戦争時の余剰金で暮らしを立てている。賃金は依然高い。しかも職人の間で能率増産の意識はめつたになく、もしそれを企図すれば彼らはサポーター

ジユ、ストライキや雇用主に対する暴行等をもつて、頑強に抵抗することは、お定まりになっている。政治的手段は行われず、妥協に妥協、やり繰りにやり繰りをしてゐる。この継続する不景気に、真正面から対処した例は見られない。労働者は、多くの成功に喜んでゐるが、最大の成功は普通選挙権の獲得であつて、今やサンディカリズム(労働組合至上主義)に向かつて進行中である。資本は日に日に減少してゐる。7億ドルの戦時余剰金も1919年

27年1月1日には国債総額13億ドルに達している。しかも不相应な配当を余剰金の中から支払い、余剰金が無くなつても、なお過大な配当金をし、高い給料も同様に支払つた例がある。昨年の外国貿易は、輸入奢侈品に対して10割の関税を課し、地方における国産奨励の熱心な宣伝にも拘らず、1億7千5百万ドルの赤字であつた。1924年、25年会計年度、日本の輸出総額は9億ドルとみられてゐるが、その中で絹と綿の2品目だけで8億ドルを超える。日本が輸出品として製造したものの中で、絹糸類を除いて2千万ドルの額に達する品目は、皆無である。

しかも、絹糸類においては、日本の労働法が国際協定に反して女工の1日11時間、2回交代労働を許しており、まさに日本がモグリ業者(利益の上前を撥ねる)である。収入少なくして贅沢を好み、能率の悪い労働に対して高賃を払い、資本はほとんど枯渇し、貿易は市場として、或いは原料供給者として、米國、支那、インドに頼れない状況である以上、日本が沿海の強國(海軍國)と戦争を始めることは経済的に不可能である。

万一、戦争に勝利しても日本を救うことにはならず、また敗北すれば二流國としての運命をも失うことになり、あるいは政府が転覆して、未だ世界で

見たことのない凄惨な革命が起きるかもしれない。日本人の戦闘能力は、なおよく分らない。日本国民は自己のために戦つて、2回の戦争勝利を得た。世界戦争には勝利者である連合國に与し、小規模の戦争に従事した。

第1回の戦争は、1895年の日清戦争で、当時支那は連戦連敗、旅順のようない堅い要塞ですら1日の攻撃で降伏した。第2回は、日露戦争で、これもまた海に陸に連戦連勝であつた。しかし、この戦争の歴史を見れば、ロシア軍は腐敗して、ハチの巢のような穴を持つていたことが分かる。ロシア皇帝の兵士(多くは愚かな百姓)の3分の2は、ボロ弾薬をもつて戦い、食料の補給よりもむしろ暇つぶしの談話と軍需品の誤魔化しの補給部隊によつて支えられていた。

世界戦争における日本の役目は、ドイツにとつて重要な青島要塞の降伏と捕虜の警護と護送の任であつた。日本は、この任務を良く遂行した。日本人々は、勇敢にロシアと戦い、近世において初めてアジア人種として歐洲國民を撃破した。そうして、支那との戦争において、日本人にアジア大陸における第1の軍事國として認められる権利を示した。しかしながら、日本は、

未だ西方戦線で戦闘した欧州強国のどの軍隊にも匹敵することは、示していない。

徴兵によって編成される陸軍は、その徴兵の母体である国民の水準以上ではなく、徴兵をもつて充足される海軍の人員も、国民の水準以上ではない。彼らに軍服を着せてみても、臨機応変の能力や創意が付与されるわけではない。一般の日本人は、魯鈍であつて個人としては、その価値はゼロに近い。

しかも日本においては、陸海軍に編入される徴兵は、国民の平均以下である。大学や専門学校で学生は徴兵を免除され、如何なる分野においても特別の技能を持つてゐる者は使用者の権力によつて兵士にされることはない。

毎年、兵士は身体の強壯な者の中から無造作に選んで充足している。したがつて、彼らは適齢者の中の最良の国民ではない。

●創意力なき国民

日本の全ての政治的、社会的構造は服従の上に建設されている。国民はすべて天皇に従わねばならず、その神性を疑ふことは反逆である。国民は国家、家庭の最高の家長である天皇に次いで藩主、その次に家長に服従しなければならぬ。政府、学校、実業界、政界並びに陸海軍において独断専行は好ま

れず、訓練において組織的にこれを排除される。思想または方法の創始に対して教師は肩を窄め、雇い主は嫌がり、巡査は追跡し、指揮官は厳正に処罰する。その結果、何を何時なすべきかを教えてやらなければならぬ国民になり、団体としてのみ働かんとし、一人でも思索することをしない。

古くからある祝祭日には習慣的に国旗を掲揚することを除けば、日本の民家や商家は、巡査が各家を回つて人民にその祝すべき日を教えなければ、特別な日に国旗を掲げることをしない。警察は、春秋の定期的な清潔法を行うべき時期を示し、その後で掃除をしたかどうかを検分に行く。彼らは、ハエを何時駆除すべきか、火事には何時気を付けなければならぬか、何時冬服を夏服に替へるべきか、その他に多くの些細なことを教える。このようにして、国民に自分で考えることを完全に停止させている。

1923年の大震災は、日本の大部分を無政府状態にした。あらゆる通信手段は、2、3分で停止した。権力はかき消され、自然の大破壊に発狂した国民は指導者を失つてしまった。一時的に命令を下すものはない、自然の感情を抑える力はなく、絶望的混乱が支配した東京には、10個の聯隊が駐屯しており、特に自慢の近衛師団もい

るにもかかわらず、軍隊と称するものが火と戦う者を助け、秩序維持に努めたのは、10時間も経つた後だった。また、横須賀大軍港には、大小の艦船百隻と2万の水兵がおり、横浜港まで半日の行程、もしくは1時間の航走距離にも拘らず、軍艦が横浜港に現れたのは、36時間後であつた。

この震災は、杓子定規では事をなすことができない場合に、日本が如何なる国であるかを示した。荒唐無稽の流言飛語に逆上して、国民は野蛮人と化した。

(中略)

日本人は彼らが白人よりも優秀であると教え込まれている。パテントを買ひ、あるいは盗んで日本の製作所も今や機械、電気器具など、外国製品に似た模造品を生産している。これらの模造品には漢数字でマークを付け、全国中これを日本製品だと思つてゐる。地方に行くと、日本人は外国人に向かつて、「米国や英国には電灯や電車や電話のような便利なものがあるのか」と尋ねられたことがある。

細菌学、製菓、地震学におけるいくつかの例外的功績を除いて、日本は世界に何も寄与していない。近頃、日本帝国飛行協会が、最初の飛行発明家に賞を贈ると決めたことが発表された。彼は今より22年前、「日露戦争中に

空を飛ぶ機械を作ればロシア兵を一掃することが出来る」と陸軍省に献策したが、実行に移されることはなかつた。新聞の説明によれば、発明家は飛行機を実際に飛ばしたのではなく、紙に紙上で作り上げて、もし陸軍省が採用すれば飛ぶだろうと信じていたさうである。このような理由で、日本人が飛行機を発明したのであり、ラングレーやライト兄弟は単に日本人の思い付きを写したに過ぎないのであり、別段大きな名誉を与える必要はないことだつたらしい。

日本がドイツの染料に対する関税とライセンズの廃止を提案し、その代わりにドイツは、日本が硝酸塩肥料及び爆薬を製造するための空気の窒素の抽出法を教える、という噂が伝わつた。その時、日本の商工大臣はこの説を否定して、「日本は化学上の発明に対してはドイツに行く必要はない。日本においては窒素抽出の新製法が発見されてゐないが、役に立つだろう」と言つた。

ある1週間のうちに、日本人が驚異的大発見をしないということはない。しかし、同様の発見が、数年前に他国において発見されてゐるという事実は述べられない。

●学問はあれども考察なし

日本人の99%は、読み書きが出来、日本は数百の日報新聞があり、そのうち数社は毎日百万部以上の発行部数を持つているが、国民はこの国の人と比較しても、自国の状態に関し悲しいほど無知である。これを見れば、1種族として日本人がその自負を持つている理由が理解できる。彼らは、頭脳においても勇氣においても優秀であると教えられ、日刊、週刊、月刊の各新聞雑誌は、発行ごとにこの信念を国内に行き渡らせている。

日本人は、考えることは教えられておらず、また許されてもいない。近頃、殆ど各国の新思想が日本に届いた時に、文部省は高等学校、専門学校、大学の学生は社会研究のためのクラブや協会等に属してはならないと厳命し、この法を厳格に施行した。大学教師が、教科書から離れて現実問題を論じようとするのは厳罰、免職、あるいは禁固とされた。日本の女性は政治演説会に出席することを許されていない。労働集会においては、何時も壇上に2名の巡查が控え、もし弁士が少しでも自由主義の言動を行うと、これを妨害し、引き立て、必要とあれば投獄する。労働問題に関しては、如何なる自由討論も許されていないので、その結果、宣傳者が「島民及び労働者の楽園」と唱

える政府の意向に沿って進む傾向がある。

日本国民は、実際自分たちがいかに遅れているかを知らない。彼らは無能でも結構幸福である。しかし、この慢心が、国民の信じている一等国の一員から漸次退歩させている。日本が、明治天皇の治世下に実現したものを見て、日本と支那、インド、ビルマなど他の東洋諸国と比較して、殆ど十人中十人が日本国民の聡明さに氣を奪われる。彼ら外国人が会見などで、追従で稱賛の辞を述べると、日本人はこれを見て自分たちの眞の偉大さに対する贈り物として受け入れるのである。

旅行者は、真相を知らずして日本の進歩と近代的なことを解る範圍で稱賛し、彼ら自身が欺かれていたため、結果として世界を欺くことになる。しかし、日本に永く住んでいる外国人は、日本人が實際は如何なるものであるかを知っている。日本人は、愛すべく、丁寧で芸術的で、親切であるけれども、彼らは神と為政者とが彼らに加えた制約の下において最善と思われる方法をもってお茶を濁している。彼らは、産業と戦争においては教えられた規則に従えばよいが、その規則通りに行かない場合には、自失し混乱する。産業においては、彼らは教えられたとおりにやる。戦争においては、強いられて同

様に行動するのである。

●日本の戦争は変化する

日本にとって、将来遭遇する戦争が、もし戦略戦術の教科書通りに実行されたとすれば、日本は有利であろう。しかし、敵の将帥が、ドイツ軍が毒ガスをを用い、英国がタンクを用いた如く新しい何かを使用すれば、日本の指揮官は誰もこれに適応することができず、軍隊を混乱から回復させることができないうかば不明である。彼らは、訓練不足や愚鈍な軍隊に対しては攻撃精神の旺盛なところを示したが、彼らに優る思考力を持った国に対しては疑問である。日本人を知っている者は、彼らがこの試験に対して及第することはないと考えている。ただし、国の防衛において、自ら欲する条件の下に熟知した地形で、愛する国家のために戦う場合は例外である。

如何なる国家に対しても、日本は脅威ではない。日本が一等国であることは、正に摩訶不思議である。この事実が、一日早く認められれば、一日早く日本との戦争問題は消滅する。これが、世界のためであり、日本の為でもある。